

東アジアの思想史の流れ——心学の視点から

吉田公平（東洋大学）

東アジアは異文化間の意思・情報を交換する際に、相互に異言語を習得して行う方法とは別に、漢字を書言葉として共有する方法が採択された。だから漢詩漢文の世界における文言・漢字を国境・民族を越える伝達手段にした。東アジア漢字文化圏である。中国大陸・朝鮮半島・日本列島は歴史の成り立ちを異にするが、近世期以後は情報の伝搬に変化が起る。その原因としては、大まかには（一）、儒学（朱子学）を重視した宋朝（960年）、朝鮮王朝（1392年）、徳川幕府が成立し、国内戦争が少なくなったこと。（二）木版印刷が普及したこと。（三）国際交流が頻繁になり商業・流通が盛んになったこと。（四）識字人口が増加したこと。などがあげられる。（三国の時間差に注意）。

三国はこの時期以降に儒学が救済の思想、文治主義の政治思想として重きをなす。

儒教思想は政治思想として理解されがちであるが、もう一つの側面として、人間は本来完全であり（禅宗）、その本質は倫理的に善であるという性善説を人間理解の根底にすえた自力による自己実現・自己救済の宗教思想である。この「本来完全」という確信に出發する「学問」を広義の「心学」という。禅心学、朱子心学、良知心学（陽明心学）、三教一致心学（道教心学）、石門心学は狭義の意味での心学である。

心学の成立は仏教、特に禅宗に源流するが、実践者に社会性・政治性を担わせた心学が儒教心学である。その際に「定理」（社会規範）を「わたし（心）」が自前で創造するか（良知心学）、現存在（心）の弱さ・不確かさを配慮して、「心の外」に措定された定理の安定性に依存するか（朱子学）、により、同じく心学でも色合いを異にする。

政治秩序が変動した17世紀に、日本では心学が本格的に学ばれるが、それを明清交代期の動向に照らして紹介し、朝鮮王朝の流れについても言及する。